

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 083(922)1218

松風会の歩み

明治維新の先駆者であり、

殉国至誠の人である吉田松陰先生は、安政六年、いわゆる「安政の大獄」で江戸伝馬町の獄で処刑された。昭和三十四年はその殉死百年に当たるので、これを契機に松陰精神を高めようとする気運が起った。昭和三十一年、松陰先生百年祭記念事業推進会が発足し、県内外有志の浄財と県・市町村の補助金千四百万円で記念事業を興すことになった。その中核事業は、一千万円をもって鴻の峯山麓の大神宮に隣接する地に松風寮を建設することで、昭和三十六年五月その完成を見ることが出来、山口県教育会がこれを主宰した。

松風寮は、松陰精神にあやからせたいと願う精神教育施設であり、経営二十一年間に山口大学男子学生六百余名を入寮させ、松陰先生の遺志を継承する有為な青年として全国各地に送り出した。その間昭和四十九年には財団法人松風会として、山口県教育会か

ら独立した。

昭和五十七年三月、市道改修工事のためやむなく寮を閉鎖し、昭和五十八年新装なった山口県教育会館に事務所を移し、吉田松陰先生を崇敬し、松陰精神の普及振興をはかり、これを現代に生かすことを目的に事業を行っている。



松風寮と役員のみなさん

松風会の歩み

昭和三十一年 吉田松陰先生殉難百年記念事業準備委員会を県教育会内に設立

昭和三十六年 松風寮竣工式・県教育会奨学部に所属

昭和四十八年 財団法人松風会寄附行為認可

昭和四十九年 財団法人登記

事務完了

昭和五十六年 松風寮廃止、新事務所へ引越

昭和五十七年 事務室を県教育会館に移す

昭和五十八年 吉田松陰先生東送之碑除幕式

昭和五十九年 松陰教学シリーズ発行開始

昭和六十年 松門一号発行・松陰教学研究会開始

平成三年 松陰研修塾開始

平成八年 「脚注吉田松陰撰集」刊行

理事長あいさつ要旨 (十三年度一回理事会)

今日は結構な天気であること。二日前に雨が降り新緑も一段と艶やかに感じる。十二年度の最後の理事会を三月三十日に開いたが、それから一ヶ月近くが過ぎた。

今日物の豊かさを感じるが、犯罪も多く心が貧しくな

っている。心の問題を重視する動きが多くなったのが昨今の動きである。松陰先生の至誠留魂のこの気持を現在に生かすことが松風会の精神である。ささやかではあるが、いささかでも寄与していると自負している。



理事会

分けても教育の問題が大変やかましくいわれている今日責任を感じるものである。それに伴う新しい事業計画を進めていきたい。何分にもこのような経済情勢ゆえ十分なこととは出来ないが、なんとかしたい。十分な御協議をいただきたい。

平成十三年度事業概要

- 一 事業推進の基本方針
- (1) 理事会の決定に基づく事業の具体化とその推進
- (2) 財政基盤再建への検討
- (3) 生涯学習社会における松陰研究・研修の推進
- 二 会議関係
- (1) 理事会
- I 第一回定例理事会
日時：平成十三年四月二十六日(木)
- II 第二回定例理事会
日時：平成十四年三月二十九日(金)
- (2) 監事会
平成十四年四月五日(金)
- 三 事業関係
- (1) 松陰研究による資質向上事業
- 第四回松陰研修塾基礎コース
- (二年で修了) 第二年度研修事業の実施
- 一回目：平成十三年六月九日(土) 山口県教育会館
- 二回目：平成十三年八月二十五日(土)・二十六日(日) 萩青年の家
- 三回目：平成十四年一月二十六日(土) 山口県教育会館
- (2) 松陰研究による学校経営振興充実事業

第十六回松陰教学研究会

- 松陰教学を学校教育の場で具現化することを目的に実施一般、小中高・特殊教育諸学校の教職員を対象に、三十名程度
- 日時：平成十三年十二月八日(土)・九日(日) 一泊二日
- 場所：セントコア山口
- 講義1「孟子と松陰」
- 講義2「現代教育と松陰：士道に学ぶ」
- 講義3「諸生に示す」
- 実践発表 高等学校関係者、座談会、情報交歓会など
- (3) 研究・研修基盤整備事業
- ア 「脚注・解説吉田松陰撰集」部分改訂増刷事業
- イ 松風会創立三十周年記念事業(仮称松陰日録)刊行
- (4) 広報活動
- 「松門」二十九号・三十号
- 「研究経過報告」の活用
- (5) 松陰研究自主団体への助成
- (6) 情報提供事業
- 松陰研究に関する問い合わせと対応
- 研究用図書の整備
- ビデオ整備
- 図書貸し出し
- 録音テープ・ビデオ等の貸し出し

今年度の大きな事業

「吉田松陰撰集」の改訂増刷
仮称「松陰日録集」の編集開始(十六年完成予定)

松陰先生読書

感想文集

(財)田中教育振興財団(新南陽市)では十年前から新南陽市内の中学校PTAに山口県教育会発行の「松陰先生に学ぶ」を寄贈し中学校一年在学の全家庭に配布しておられる。

昨年読書感想文の募集をされ百十七編の応募があり、優秀五編、佳作十編、特別二編を選考された。その中から優秀作を田中教育振興財団の御協力により掲載する。

「松陰先生に学ぶ」を読んで
福川中学校二年(現三年)

井上 真理

私は、「松陰先生に学ぶ」を読んで本当の学問を少し学んだと思います。特に「勉強するということ」を読んで、学問とは、今まで自分なりに

考えていたことと違いました。

とくに中学校での勉強は、高校へ入るためのものだと思いつつながら勉強をしていました。

でも松陰先生は、そう言うふうに、考え違いをしている人もいるが、そのような気持ちで始めた勉強は、進めば進むほどだめになると言っていました。

私は、松陰先生が言っていることはもっともだと思えます。でも現実にはちよつと違ふと思います。なぜかというところ、私たちが学校だけではなく、塾や家庭教師など、忙しい毎日の人が多いのではないのでしょうか。それらは、やっぱり上の学校へ進学するための勉強だと思っています。

「学を言うは志を主とす」人は初一念が大切。今、学問を為す者の初一念も種々あり。就中誠心道を求むるは上なり。名利の為にするは下なり。故に初一念名利の為に初めたる学問は、進めば進むほど其の弊著われ、これを讀んで、考えさせられました。

私が中学校へ入ったときの目標は、なんだったろうか、がんばろうという気持はあったけど、確かな目標はありませんでした。

でも、私は、「勉強するということ」を読んで一歩でも松陰先生の言う「心から人としての正しい生き方を学ぼうとするのは上である。」という教えに近づけるような勉強をしたいと思っています。

「志を立てて以つて万事の源と為す」

何事をするにも、しっかりと志を立てることがすべての根本で大切なことである。私の人生の目的はこれからしっかりと考えていきたいと思っています。



「松陰先生に学ぶ」

山口県教育会発行



優秀作生徒萩を訪ねる

「松陰先生に学ぶ」を読んで
福川中学校二年（現三年）

石川 裕美子

私がこの本を読もうと思つたのは、家族で裁に行つたとき、小学校の銅像でだけ知つていた吉田松陰先生の学校（松下村塾）を見たからです。小さくて狭い建物だったのですが、中には沢山の弟子たちの肖像画が並んでいました。父が教えてくれたのですが、その中には明治時代の総理大臣など偉人と呼ばれている人がたくさんいるそうです。また、すぐ横には松陰神社がありました。松陰先生は、そこで神として祀られています。

す。松陰先生は三十歳で亡くなったそうですが、今もこのように尊敬されているのを知り吉田松陰という人物が、いったいどのようなことを教えたのか、何をしたのか知りたいと思いました。

この本を読んで一番心に残ったことは、松陰先生がペリーの黒船に乗り、外国の学問を学びに行こうとしたときのことです。自分を慕っていた門下生を置いて、見つければ死刑になるかも知れないのに、幕府の許可もなくアメリカ船に乗るのはとても勇氣と覺悟のいることだったと思います。口で立派なことを言っても行動がともなわないと人は、信頼されません。命をかけて行動することが出来たからこそ松陰先生は、弟子たちに尊敬され、現在でもその教えが大切にされているのだと思います。

松陰先生の言葉で「道を知ること真なれば必ず行うこと至る。道を行うこと至れば必ず知ること真なり。」とありますが、自分の信念のために、どんなことにも恐れずに立ち向かい、決して努力を惜しまない松陰先生の心は、とても強いと思いました。このような強い心は、今の時代では忘れかけられているように思ひ

ます。私もこれから一年も経たないうちに、受験という人生の大きなハードルをこえなければなりません。さらにその先にもたくさんハードルがあります。「どうせ自分には無理だから」とあきらめるのではなく「絶対にここに受かるんだ、やり遂げるんだ。」という気持を強く持ちたいと思います。

また、松陰先生は「仁（人をいづくし愛する心）の大切さを教えておられます。先生のいうように仁を持つて行動するようにすれば多くの犯罪や不正がへるのではないか」と思います。

さらに、「読書尚友は君子のことなり」とありました。松陰先生は多くの本を読み、たくさんのお話を学ばれたのだと思います。私も、松陰先生を見習い多くの本を読み「道」（人間として当然行うべきこと）を学んで行こうと思っています。

「松陰先生に学ぶ」を読んで
福川中学校三年（現在高校
一年）

梶谷 綾乃
私は今まで松陰先生について、ほとんど何も知らなかったと言っているが、知らない知らない

かったと思う。知っていることと言えば、山口県（長州藩）出身で松下村塾を開いたこと、ペリーの黒船に乗り渡航しようとしたが失敗し罪人となったこと、松下村塾に高杉晋作らが入門し育てたこと、そして、安政の大獄で処刑されたという歴史上のことばかりで、松陰先生の生き方、教えというものは何も知らなかった。これでは、知っている……とは言えない。

この本を読んでいて私の心に残った松陰先生の考え方は「知行合一」「人間尊重」。

そして、国や人々を思う心や正義を信じる思いが好きです。それに、自分が考えていること、自分がすべきことを全て実際に行動に移しているところが好きです。例えば「知行合一」は、黒船で渡航し自分の目で確かめようとしていました。「人間尊重」もそうです。それは、松陰先生が「婦人会」をやっていたところからもわかるし、塾で武士の子、足輕の子、商人の子がみんな同じに勉強していたところからもわかります。松陰先生の考えや行動は全て人々や国につながっていると思います。あのまま渡航していれば西洋の文化を取り入れられただろうし、身分に関係なく勉

強することは差別をなくすことになりません。そう思えば、松陰先生が罪人になり処刑されたのも人々のためということになります。こんな人を使う氣持がとても大切だということを改めて知らされた気分でした。でも松陰先生はあまりに人々のことを思いすぎて焦ってしまったのではないかと思います。早くみんなが幸せになるように、すぐやめさせないと、という氣持でいっぱいだったと思います。相手にも相手の思いとか事情があることを忘れていきます。少しずつでもいいから焦らずに、ゆっくりと先生の思いを人々に伝えてゆけば、相手にも少しずつ伝わっていつか変えることができます。早くに死んでしまったからそれとできなかったけど、もしそれができていたら、日本はきっと今、人のことを大切に思える優しい人々がたくさんいたのではないでしようか。

たくさんの人の氣持を考えない犯罪が毎日のように起きている今、人を思うという氣持ちがとても大切なものだと実感できます。

つまり先生の考えや思いは、日本をもっと別の形にしていたかもしれないほど大切なものかもしれないのです。

こんな大切な人を大切に
する、という思いを私は大人に
なるまでに育てていきたいで
す。

そして、いつか仕事につ
いたら少しずつゆっくりでもい
いから人々に伝えていきたい
です。この本を読んで人を大
切にするという思いを伝えら
れる仕事につきたいと思いま
した。

もしかしたら、それが誰か
を私も松陰先生の本で学んだ
ように、教えてあげられるか
もしれません。

「松陰先生に学ぶ」を読んで
福川中学校三年（現在高校
一年）

八木 裕花
私は、松陰が萩に生まれた
というのを知って、とても身
近に感じました。この本を読
むまでは全然なにも知らな
かったけど、読んでからいろ
ろ分かりました。

勉強の態度がよくないと、
たたいたり縁側から突き落と
したりされて必死に勉強をし
たというのはいやうさうさだ
け、それくらいやったほうが
後で自分のためになると思い
ます。松陰は勉強ががんばっ
て、野山獄にいた一年二ヶ月
の間に約六百冊の本を読ん



優秀作生徒親子萩を訪ねる

だから素晴らしい考え方や判
断が出来る人になったんだと
思います。危険な考えを持っ
ていると言われ死刑にされた
けど、それはその時代の人々
の考え方とかが間違っていた
からで、松陰が悪かったわけ
じゃないとも思いました。

松陰の家族も松陰と同じく
らい素晴らしいと思います。
励ましあって生きたから、努
力も分かり合えてうらみあう
こともなかったし、本当にい
い家族でうらやましいです。
私も家族を大切にして協力し
ていきたいです。

私は、すぐあきらめてしま
うことがよくあります。でも
松陰は自分を立ち直らせ、あ
きらめたりしませんでした。
だから才能の芽を誕生させる
ことができたんだと思いま
す。今の私は自分に自信がな
くて一人では何もできません。
このままでは才能の芽が
かれてしまうので、大好きな
部活では、自信が持てるよう
に、もっともつと頑張ろうと
思います。

今から百四十二年前の安政
六年十月二十七日午前十時、
吉田松陰は三十歳で死刑にな
りました。まだ若いのに死ん
でしまったのは、すつごくか
わいそうです。私はお母さん
やお父さんにもつともつと生
きていてほしいし、私もずつ
と生きていきたいです。たまに
死にたいと思うときがあるけ
ど、家族や友達とはなれたく
ないから自分なりにがんばっ
て生きてます。松陰はとても
つらかったと思います。堂々
としていたらしいけど本当は
つらかったと思います。周り
の人たちもすごく悲しんだと
思います。いろんな言葉を残
し、多くの人に尊敬された松
陰だから、今でもこのように
本があるのだからみんなも読
んだほうがいいと思います。
た。

志をもった人間になるために
福川中学校三年（現在高校
一年）

西村 美由紀

「松陰先生に学ぶ」を読ん
で学問することにおいて最も
大切なこと、人間のあり方を
私は知りました。

まず、勉強のことについて
は勉強の本当の意味を知りま
した。

私にとって勉強とは、自分
が将来楽しく暮らすためのも
ので仕方なくやってきたもの
であり、いやいややってきて
いました。でも、この本を読
んで勉強とは「自分を立派な
人間にするためのもの」とい
うことを知って、勉強への価
値観が変わってきました。

そして松陰先生のようにつ
らくても絶対投げやりになら
ないというあきらめない心
と、決意したことをやりぬく
強い意志を私ももてたい
なと思いました。

次に、松陰先生の生き方で
見習いたいと思ったことは自
分自身にきびしくし、自分を
きたえていたことです。

私も自分にきびしくなろう
と思っても心のどこかで「ま
あいいや」と甘えています。
テストのために勉強の計画を
立てて実行しても数日であき
らめてしまいます。そこで松

陰先生のように「熱中」する
ことができれば何事でも持続
することができるとは思ってい
ないかと思いましたが。

熱中するには、少しずつで
もいいからあきらめずにがん
ばらなければならぬと思ひ
ます。すると、必ず上達しま
す。上達するとおもしろくな
って、「熱中」できると思ひ
ます。

松陰先生は長州から江戸に
行って学問にはげんだり塾を
開いて今までは違う現代的
な「読んで、書いて、話し合
って、体を動かして学ぶ」と
いう教育をしたそうですが、
松陰先生がもしもいなかった
ら、私たちの時代の学校の授
業に体育はなかったかもしれ
ないかと思ひました。

「少年よ大志を抱け」とい
う言葉がありますが、これは
クラークの言葉ではなく、松
陰先生が次の世代である私た
ちに残した「大きな志をもつ
て生きなさい」という強い願
いのこもったメッセージだろ
うかと思ひました。

私はこれから大きな目標を
持ち前へ進んで行き、いつか
何かの役立つことができるよ
うになりたいです。

第十五回 松陰教学研究会 研究報告

平成十二年度日程

十一月二十五日(土) 二十六日(日)

山口県婦人教育文化会館

来賓に山口県教育庁指導課教育指導監山根和夫氏、山口県小学校長会副会長藤本和男氏をお招きし、励ましの言葉をいただき二日間の研修をスタートした。

その研修の講義の一部をここに紹介する。

教育者松陰の真髄

松風会理事 石原 啓司

教育者としての吉田松陰

吉田松陰は六歳で叔父吉田大助の死後、吉田家を相続した。

吉田家は、藩校明倫館で山鹿流兵学を教授する学者の家である。

したがって、吉田松陰は六歳で、藩校明倫館の教授となるよう運命づけられたのである。

り、以降、教育者としての修業を受けることになった。

松陰の幼児の教育を担当したのが、当時は杉家に同居中であった父の弟、玉木文之進であった。松陰は天保九年(一八三八)九歳で、藩校明倫館に家学教授見習として出勤し、翌十年、初めて家学である山鹿流兵学を教授した。

嘉永元年(一八四八)十九歳で、独立師範となり、嘉永四年の第一回江戸遊学まで明倫館教授として門下生を教育した。

嘉永三年から四年一月まで藩主毛利敬親も松陰の門下生として山鹿流兵学を学び、一月十五日には山鹿流兵学の皆伝を受けている。



教学研究会参加者

明倫館教授としての吉田松陰は、藩主の御前講義で、その立派さを賞され、再三表彰を受けてはいるが、特別に教育者として優れた資質が見られた記録はない。後年、松下村塾の指導者として、優れた教育を行った吉田松陰は、どのようなにして生まれたのだろうか。

それは、安政元年(嘉永七年)「下田踏海事件」(ペリー艦隊と共に出航し、外国事情を研究しようと考えた)に失敗し、萩の野山獄に囚人として収監された以後である。

(一) 松陰の獄中教育

松陰の野山獄生活は、安政元年十二月十五日に出獄し、生家である杉家に幽閉されるまでの一年二ヶ月である。

野山獄は長州藩の刑法では、士分の者を収容した獄であり、囚人は家族の「借牢願」によって収容された者で、刑期はなく無期懲役に等しかった。

松陰の同囚は十一名で、最年長者は在獄五十年という人もいた。松陰は彼らが生涯をこの獄で終わるといふ絶望感に打ちのめされているのを知り、自らも同じ囚人だといふ悲しみに涙をおさえることができなかった。

しかし、松陰は、長州藩の軍学師範という地位を失い、何もない裸の人間として、同囚と交わり、彼らと共に勉学に励み、自らも猛烈な読書をはじめた。

獄中の松陰が読んだ書物の記録は「野山獄読書記」に示されている。在獄一年二か月の間に六百十八冊を読了している。

しかし、松陰は自分のために勉強ばかりしていたのではない。同囚のために「義を講じ道を説き、相与に磨励(努力)して以って天年を歿(死)と期す」(「野山獄囚名録叙論」)囚人に生きがいを与え、松陰が行った教育は

① 獄中座談会

同囚の人たちが、時代の動きに対し松陰に質問をし、それに松陰がこたえたもので「獄舎問答」とし残されている。

② 読書会

一ヶ月かけて「孟子七編」の講義をし、その後、安政二年六月から十一月まで孟子の輪読会を行った。この講義は松陰の出獄後も、父、兄が講義の中断を惜しみ、完成させるため、自ら生徒となつて松陰の講義を聞き安政三年六月、一年間かけて修了した。これ

が後に「講孟余話」となつて残されたものである。「講孟余話」は松陰の著述の中では最も重要な文献であるから後で説明する。



③ 俳句会

同囚の吉村善作が俳句に優れていたのが松陰以下囚人が吉村の指導のもとに句会を行い、獄風改善一手段とした。「獄中俳諧」として記録されている。

こうした、松陰の獄中教育の実践は野山獄の空気を一変させていった。

松陰はこの教育実践を通して、罪人もまた救えるという確信を持つに至った。それをまとめたものが、安政二年六月と九月の二度にわたり書かれた「福堂策」(上・下)である。これは、単に松陰の獄舎改善論だけではない。やがてはじまる松下村塾教育の骨格をなすものを示している。

「福堂策」(上)

この中で、獄舎改善のための方策を具体的に示し、「人間の性は本来善であり、たとえ罪を犯しても、「教育」によって指導できる」とし、「人賢愚ありと雖も、各々一、二の才能なきはなし、湊合(総合)して大成するは、必ず全備する所あらん」と、人間の人格の尊厳に基づく教育に到達したのである。しかも、これは読書や思索の成果ではなく、自分の実践体験から生まれたものであった事に注目しなければならぬ。続けて「是れ亦、年来人を閲して実験する所なり。人物を棄遺せざるの要衝、是れより外、復たあることなし」と説いている。

松陰の囚人釈放運動

安政二年十二月十五日、吉田松陰は、野山獄から釈放され、生家の杉家に幽閉されることになった。

しかし、自宅に帰った松陰は、同じ獄で生活した人々の事を忘れることができない。自分一人が許されたのは心苦しいのである。

「食を得ては則ち懐ひ、衣を得ては則ち懐ひ、寒夜爐に当たりては則ち懐ひ、晴れ日庭を歩みては則ち懐ふ。懐ひの心を結ぶや、未だ嘗て一日も



釈然たるを得ざるなり

松陰は最も古くからの最良の友人である中村道太(九郎)を通じて、藩政府に囚人釈放運動を依頼し、自らも要路に働きかけた。

その成果は、安政三年十月、囚人の釈放となって実現した。松陰は友人の中村道太の努力に感謝し、礼状を送っている(「中村道太に与う」(安政三年十月十六日))。その中で「野山の滞囚(囚人)の釈放を知り、僕(松陰)驚喜踊る躍すること(喜ぶさま)身の囚を脱せし時より甚だし(自分が釈放されたときの喜びよりも大きかった)」これは、松陰が常に相手の立場にわが身を置き、相手の心になって、わが身を考えてみる気持の表れである。

つているものである。この松陰の人間観は、孟子の説いた「性善説」にもとづいている。真の人間愛は「相手がよかれと思う心」と「自愛心(自分を大切にする心)」に立脚したものである。その点で、幕末に生きた松陰は自分が武士として立ち、士農工商の身分制度は否定しなかったが、それは、職能による区分であり人間の差別ではなかった。

したがって、松陰の眼は常に「水平線」の眼として、同じ人間観に立つものであり、「上から下を見る」同情や權威の押し付けではなかった。野山獄での実践体験と、この人間観の確立が教育者松陰の開眼をもたらしたのである。松陰の友人中村道太について記しておく。

松陰は安政六年、ただ一人、松陰の行動を支持した門弟の入江杉蔵に後事を託す遺言を何通か残しているが、その中で、自分の友人を列挙し、その特性を記し、入江にも師事することを示したのであるが、その中で

「吾れ(松陰)平生、飲(酒)をむさばらず、色に耽らず、樂しむ所は、好書と良友のみ」とし、最も古い友人は中村道太であり、次が来原良蔵と土

屋蕭海だ」と記している。

「中村は、吾にさからうこと最も多し」「しかし、さからう者(自分と意見が異なる)の益、あるいは合う者(同意見の者)にすぐ」と言っているように、中村道太は生涯の良友であった。

なお、中村道太は嘉永二年、明倫館での松陰兵学門下生であるが子弟というより最大の親友であった。不幸にして、中村道太も禁門の変の参謀の一人であつたため、元治元年、長州藩保守派によって野山獄で処刑された。村田清風が最も期待した明倫館出身の長州藩革新派官僚であり、明治維新まで生きていたらと惜しまれる人物であった。

来原良蔵は、木戸孝允の義弟であるが、松陰と最も意見が合い、安政元年、松陰が海外渡航を決心したとき、最も世話になった人物(「回顧録」に詳しい)であった。

二 吉田松陰の教育観

松陰の教育観や松下村塾の教育目標は、松陰の著述や書簡の中でいろいろと示されている。

ここでは、三つの基本的な資料で松陰の教育観を見ることにする。

「士規七則」(安政二年正月)

これは、松陰が野山獄の思想の中で発想したもので、人間の真のあり方、武士としての生き方についてまとめたものである。松陰の教育観はこの「士規七則」で確立された。

第一則 真の人間になれ。忠と孝が根本である。

第二則 日本人として、君臣一体、忠孝一致を図れ。

第三則 士道は「義」を最も大切にせよ。

「義」を最初に説いたのは孟子である。孟子は孔子の仁愛の心を基本とし、人間社会の秩序を確立するためには、人は各人の立場、職能によって仁愛の心を実践する道筋が必要とした。この各人が守り育てる愛の道筋を「義」とし、「仁愛」の説を立てたのである。

第四則 士は公的任務を果たす義務を持つ。公明正大(私利私欲をすてる)が基本。



「松下村塾記」を読む

山口県立大学名誉教授
県教育会会長
松風会理事 河村 太市

はじめに

「松下村塾記」は松陰先生が松下村塾を主宰される前に、叔父の久保五郎左衛門に頼まれて書いたものである。

松陰は杉家から吉田家へ養子に行く。吉田家は代々明倫館で兵学特に山鹿流兵学を教える家である。松陰の叔父の大助も杉家から吉田家へ養子に行ったものである。大助の妻のクマさんは福栄村の森田家から吉田家へ嫁いだ。森田家は農家である、当時は農家から武家の吉田家へ嫁ぐことはできないので一旦久保家に養女に入りそこから吉田家へ嫁いだ。松陰から言えば義母になる。このように杉家と久保家はつながりが深い。

さて松下村塾の概要は次のようになっている。

玉本文之進（天保十三～嘉永二）七年間

久保五郎左衛門（嘉永二～安政四）約八年間

この当塾の塾は寺子屋のようなもので読み、書き、そろばんが中心であった。

吉田松陰（安政四～安政五年十二月）一年一ヶ月

小田村伊之助・久坂玄瑞・久保五郎左衛門

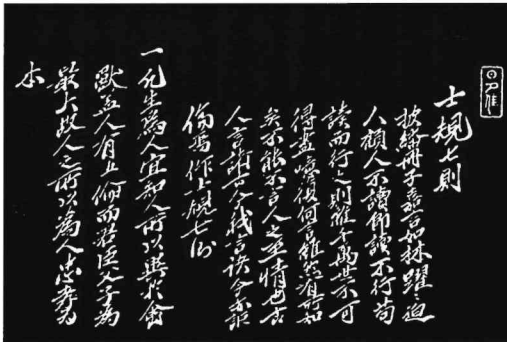
馬島甫仙（慶応元年～明治三）五年間

玉本文之進（明治四～明治九）五年間

杉 民治（明治十三～明治二十）約七年間

松下村塾は松陰主宰のみではなかった。

久保五郎左衛門が松陰に塾のモットーについて書いて欲しいと頼んだ。松陰がそれを引き受けて書いたのが「松下村塾記」である。これには松陰先生の教育についての理想というかこのようでありたいと言う気持ちがあらわれている。「士規七則」は人間のあり方が書かれ、「松下村塾記」は特に教育に焦点を当てて書



かれていた。この二つを踏まえると凡その松陰の考えを知ることができる。

一 松下村塾記の構成

凡そ次のように分けて考えることができる。

(一) 地域（萩）の自然環境と歴史（はじめ～P三九八の九行目）

(二) 「村塾記」執筆の事情（P三九八の一〇行目～同一六行目）

(三) 地域と松下村塾（P三九八の終二行目～P三九九の一行目）

(四) 教育の目的と使命（P三九九の二行目～同終五行目）

(五) 塾教育を継ぐことの松陰の決意（P三九九の終四行目～同三行目）

(六) 塾教育の方法（P三九九の終三行目～末尾）

二 「松下村塾記」からのメッセージ

松陰が、これをメッセージと言っているわけではなく、私たちがメッセージとして受け取るのであり、選択権は私たちにある。

例えば学校の伝統についても「これが伝統だ」というものがあるのではなく、むしろ今の人が作るものである。松陰からのメッセージにして

も、当時の人が受け取るのと、現在の私たちが受け取るのとでは大きな違いがあることを考えねばいけない。

松陰の「諸生に示す」の中に「書は古なり、為は今なり」と言う言葉がある。書かれたのは昔であるが読んで行動するのは今である。その問題を検討しなくてはならない。現代の我々が松陰を読むわけで、このことをしっかりと押さえておくこと。

(一) 教育の基盤として、地理と歴史をふまえること

A 松陰の地理学観（地政学）

「地を離れて人なく、人を離れて事なし、故に人事を論ぜんと欲せば、先ず地理を觀よ」（「金子重輔行状」P二四二）

内村鑑三は彼の著「地人論」に「松陰は上記のようなこと（地を離れて…）を言っている。松陰は地理的なことを踏まえて政治を行っている」と。

松陰は松下村塾のことを書くときに地理的・歴史的なことを押さえて書いている。私たちがこのような見方を参考にしたいものである。

I 山口県教育の自然・文化環境の特質

山口県はあまり高い山がな

い。このことは隣の地域へ行きやすいこと、また川が比較的よく発達していることにつながる。川が発達していることは山奥と海岸の交通が容易で盛んであること。それは谷が発達しすぐ隣の地域へつながる。山口県の方言が、どこもあまり変わらないのはこのことと関係する。また、歴史の治世者がいつも同じ地域を支配し、そのため画一的である。



(二) 地域と学校

A 「塾係くるに村名を以てす。……」（P三九八～三九九）

塾の名前は村の名前を取っている。村の人を道徳的にできればそれでよい、しかし、村の人に対して何ら教育的なことができないとすれば、大きな恥であると言っている。

学校の名前のつけ方には大きく三通りがある。まず地区の名前を取っている。次に素晴らしいよい言葉を取っている。三つ目はナンバーズクルである。

「村塾の第一義は潤里の俗札を一洗し、枕戈横槊の風と為すに在り」(岡田耕作に示す) P 四四六

岡田耕作が正月に松陰先生の所を勉強の為に訪問する。松陰は岡田に村塾の一番大事なことは、村の一般の人の道徳性を一掃し、武士としての心構えを広めることであると

言っている。

イ 地域の教育力の構成要素

① 地域を愛する住民の心(官民響動参画教育体制をつくる)

② 社会規範

③ 教育についての住民の意識・態度

④ 住民への体験付与力

⑤ 教育関係の施設・設備

⑥ 教育関係の組織・団体

⑦ 学習ボランティアの確保

ウ 学校への期待(田子一民『小学校を中心とする地方改良』大正五)「大島郡の老婆学級」

田子は都濃郡の郡長として赴任し、本を著している。この地方改良(一ノ宮尊徳思想)は小学校を中心に行うべきとして



「士」は行くと言う意味、即ち心が行くことである。その志に向っていくことを助けるのが教育である。

学校での進路指導は教育の中核でなくてはならないと思ふのであるが、今の教育はどの進路だけのことになって

いるのではないか。教育は正に進路指導そのものでなくてはならない。

「士規七則」(P 二五二、二五三)

「士規七則」は全体で七項目から成っていて、終わりに

「約して三端と為す」とあるのは、要約して立志・択交・読書の三つと言うのではない

と思う。孟子に「四端説」と言うのがあり、はじめとかきつけかけと言うように捕らえて

いる。このことからして、要約ではなく、この三つを以つて七則を確実に自分のものにするための不可欠の端緒としていると解すべきである。

イ 目的に向う教育(学習)

俊傑の学、時務の学、(P 一四一「博学にして要を失する、是れを雑学と謂ふ」)

教育は、今当面している問題について学ぶのであり、学

は時代にとつたものでなくてはならない。脈絡を以つて勉強しないとそれは雑学にな

る。

参照：P は「吉田松陰撰集」

「華夷の弁」の弁は分ける意があり、華と夷を分けること、華は中国を指している。

北は北夷、南を南蛮、東を東夷、西を西獣とよんでいる。

これをひつくるめて夷という。中国は時代により王朝が変わっている。それは日本

のように時代が変わるだけでなく、かつては夷であったものが華になることがあることと根本的に異なる。

教育は次世代の為にあるものとさえ思われる。

「あとからくる者のために」板村真民

あとからくる者のために 種を用意しておくのだ

あとからくる者のために 詩を書いておくのだ

あとからくる者のために 山を川を海を

あああとからくる者のために みなそれぞれの力を傾けるのだ

あとからあとから続いてく

あ、の可愛い者たちのために

未来を受け継ぐ者たちのために

みな夫々自分で出来る何か

をしてゆくの

おわりに

「義は人のみちなり」人間が道徳的な行為をするのが義である。仁は心の持ち方。

「義」の字は上は「羊」あるいは「美」であると。羊は家畜で財産であり、ものの価値である。美も価値である。

下の「我」を価値あらしめることが「義」である。正しく行動すれば義が備わる。

「人間讃歌の新しい風」

財団法人山口県教育財団

課長 見好 豊

一 はじめに

昭和五十年に始めた山口鴻峰松陰読書会、その設立当初から所属し、ささやかな歩みを続けているが、そのまともとも言うべき会誌「涵育薫陶」が現在、十九巻となった。松陰先生の研究も長い付き合いとなったが、まさに「日暮れて道遠し」の感がある。

今夏、東京世田谷の松陰神社へ行った。松陰神社を核として、地区をあげて町おこしに取り組んでいるが、本家でもある山口県も、もっと知恵を出すべきであると思った。

最近、「烈々たる日本人」(祥伝社：よしだみどり著)を読んだ。これは松陰の弟子、正木退蔵の談話をもとにイギリスの文豪スチーヴンスが松陰のことを書いた「ヨシダトラジロー」に生きる力を与えてくれる日本の英雄の話のことについてである。

著者のよしだみどり氏は、スチーヴンス著「子どもの詩の園」の翻訳者であり、長門市出身の詩人金子みすずを世に押し出した西条八十氏も同じ詩を訳している。またスチー

ーブンス兄弟社から派遣されたブランドン技師によって設計され、建築された下田の神子元島や豊北町角島夢ヶ崎にある角島灯台、その角島に渡って現地踏査をした松陰。この十一月三日、角島大橋が開通したが、松陰―みすず―スチーヴンス―角島、そして神子元島とつながっていることに驚異すら覚えた。

二 一隅を照らす行動力

二十一世紀は行動実践の時代である。自分もでき得る限り行動することになっている。

(一) 地下道の清掃

町内で地下道の清掃を行っているが、参加する者はすべて高齢者ばかりである。老人が地下道を雑巾がけをし、そのそばを若者が素知らぬ顔で通りぬけていく。さらに自分の家のごみを持ってきて捨てる始末。

一体モラルはどこへ消えたのかとつくづく思う。

作家曾野綾子さんは文藝春秋において、教育改革国民会議第一部の議論をもとに「日本人へ」と題し、その報告を行って奉仕活動の必要性について述べている。奉仕活動を実践することは是非必要なことと考えるが、忘れてならないことは「先生と一緒に

する」「友達と一緒に活動する」「家族や近所の人と一緒に活動する」ということが極めて大切であると思う。

松陰は「相労役」(今で言う奉仕活動・体験活動)を大切にしていた。

彼は幼少の頃から、共に働いて汗を流すことで、人と人の心、コミュニケーションが最もよく通い合うということを実感していた。

今「学校を変える」ということで、いろいろと議論されているが「掃除の時間は、全ての仕事において子供と一緒に掃除に没頭する」ことを一年間続けて見たら、学校は一変するのではないかと、自分の学校経営の反省を込めて思う。

(二) ひまわりを育てる

昨夏、町内荒地にひまわり



を植えさせてもらったが、立派に育ち、それに人が集まり、そのことで人の輪(和)ができた。

例えば、最初は私が水をやっていただけなのに、いつの間にか、灌水をしてくれる人がでてくる。また肥料をやる人も出る。竹の支柱を立てる頃になると近所の者が寄ってきて、自然にお互いの会話が広がっていく。

今、日本には、「力のない自分には何もできない」「どう言ったら変わらぬ」「自分一人ではどうすることもできない」というあきらめが満ちている。

例えば、ひまわりを育てるというささやかな身の回りの小さな実践行動の積み重ねが大切である。頭ばかりではなく一歩前に出て行動することが世の中を替えることにつながると実感した。

(三) 大切にしたい「敬」と「慎」「仁」と「義」

教育会「心の羅針盤」を育てる家庭教育の研究にかかわって印象に残ったことは、河村会長の「敬」と「慎」(相手を尊敬するともに、自らが慎む)気風が無くなってきたということである。松陰の家庭にはそれがあつた。

さらには、「仁」と「義」(おもいやりの心と人の行くべき道)がすたれたことである。これらは、数々の社会的モラルを人の心の中に水のごとく湛える器であり、この精神をないがしろにして何を教育しても無益であろう。

また、今の社会では子育てに基本的な尺度がない、心棒がない。松陰を原点にしたらいと思う。

松陰の家庭には「世に及び難き美風がある」と誇れるものがあるというのは実に素晴らしいことである。これは山口県の誇りでもある。

三 二十一世紀の新しい風

昔長州に吹いた風、松陰が吹かせた風と言ってもよい。それは①気分の明るさ、元氣②友情の深さ、思いやり、特に情けが深く礼儀正しく、人間関係を大事にする、③潔く生きる、うそは許せない、④気概(エネルギー)に満ちている。松陰はその最たる人である。松陰は考察の人というより行動の人、構成の人ではなく気概の人、すべてのものに距離を維持することに不得意、状況の真つ只中に突入していくことを得意とする人である。

司馬遼太郎氏は「長州には

優しい精神風土がある」と言っておられる。そういう風を二十一世紀にも吹かせなければならぬ。

わが国には閉塞間、不安な風、行き詰まりを感じる。二十一世紀は人間讃歌の時代、共生の時代、地球の時代などといわれるが、松陰の考えを基本に置いた生き方が見直されるところに思っている。これらのことに對しての尺度基準として、物と心、伝統と進歩、個人と公共団体という視点が大事であり、そのバランスが問題である。

四 現代人が置き忘れたもの

(一) 何のために生きるのか、何のために学ぶのかという目的を失った。

(二) 心の羅針盤を失ってしまった。

(三) 公に尽す気持が薄れた。公德心が忘れられた。元来日本人は公のことを優先しながら自分や家族のことを考えていたが今はどうもそのようになっていない。

(四) 利を追い、義が忘れられた。

(五) 一億総評論家で理屈は言うが行動は伴わない。

(六) 自己中心の自由で野放し牧場のようだ。

(七) 親性の弱体化、親になることはできるが、あり続けることが難しくなっている。

(八) 結果主義、ただ勝つだけでよいのか、結果を急ぎすぎる。

お互いに心しなければならぬことと思う。

五 夢と知恵を育む山口県教育

夢は柔らかい、ほんわかとした感じがするがそうやわな教育ではないと思う。

幼稚園教育で倉橋惣三さんが「困難に打ち勝って疲れず」と言っておられるがこれこそ生きる力である。困難を乗り越え、しかも意欲を失わないでやっていく、これがイメー

ジとして浮かんでくる。曾野綾子氏は「不運が持っているエネルギーを我が物とする」と言っている。失敗を恐れずチャレンジする精神が大切である。夢と知恵の教育はふわーとしたものではない。

いままでの学習指導要領の変遷をみると all structure (知識・概念) か all activity (体験・活動) の両極を振り子のようには動いている。現在は体験重視となっている。総合的な学習がブームとなっていることは悪い事ではないが、一

方で「基礎学力」を絶えず念頭に置く必要がある。学校では教科の授業研究などが最近少なくなり、例えば「子ども目線に合わせた授業はどうあればよいか」と言ったことなどが多く見られる。それ自体悪いことではないが、基本が忘れられ、失われないようにしなければならぬ。極端な「体験重視」は現在版「反知性主義」になりはしないか危惧する。学習が体験の一人歩き、はい回りになってはならない。

六 松陰の教学精神を生かす

(一) 動機づけ (志) の教育を進める

小学校では「道徳」、中学校では「人間科」高校では「人生科」を設けるべきということが提案されているが、どのような生き方がしたいのか、どのように生きていくのか、考えさせることは大変重要である。

芭蕉が伊勢で弟子の服部土芳と出会ったときに「命二つなかに生きたる 桜かな」と言う句をつくった。

「命二つ」というのは先生と子どもの二つの命(たましい)が火花を散らすような出会いが大切であるということ

だ。このような出会い、人の志を奮い立たせる子供のたましいに呼びかける力、ある種の熱(感動)が大切である。一斉授業ではたましいが届かないようである。できるだけ個を大切にしたいものである。

(二) 長所拡充の教育

松陰は短所を克服し長所を伸ばすことを重んじて、次のように言っている。

「凡そ人は皆拡充の術を知らず。以て聖人に及ばざる所なり。よろしく良心発見のところを知りて拡充を勤べし。」と。

「彼松陰の人接するや全心を挙げて接す、彼の人を愛するや全力を挙げて愛す。」徳富蘇峰

「松陰はあらゆる人間に對しておそろしいばかりの優しさ(いたわりの心の強さ)をもった人物で、しかもその優しさと聡明さをもって、人の長所を神のような正確さで見抜く。」司馬遼太郎

「人誰か過失なからん。ただ彼(松陰)は余をしてその欠点を忘れしむ。彼は多くの欠点を有したり。然れども彼は人をしてその欠点を忘れしむるほどの真誠なる人物なりき。彼の赤心はかくまで深く

人に徹せしなり」徳富蘇峰
「人には各々長ずる所あり、棄つるべき人なし」佐藤一斉
オリンピック、マラソン優勝者高橋尚子選手の監督小出義雄氏は「君ならできる」と言って高橋選手を触発したそうである。これは「コーチング理論」と言う四十年くらい前の理論である。コーチングとは「やる気と能力を引き出すコミュニケーションの技術」で潜在能力の開発である。

手だてとしては①相手をよく知る②期待を伝える③話し合いで目標を立てる④援助する⑤褒めて、改善点を指摘する
松陰はこのような横文字は知らなかったが、人づくりのコツ(くせ)を熟知していた。これを学ばない手はない。
松陰のくせは①学びぐせ②働きぐせ③長所を伸ばしてやるくせ④人を認めて褒めるくせ⑤自分で責任をとるくせ⑥プラス思考をするくせ等がある。

これからは、長所拡充の教育が重要であることを強く言いたい。

(三) 生と死の教育

今の学校に欠けているのは「いのち」(生と死)の教育である。

日赤にホスピス病棟が設置

されたことを記念する講演会があった。その中で、病棟は①明るさ②広さ③静かさ④あたたかさが大切な要素だと。

しかし建物だけでなく医師、看護婦、教師などすべてにそのことが当てはまるのではないか。たとえば看護婦がおしゃべりで一方的に大声で話せば、それはホスピス病棟には不向きであるということも知った。

また、最近絵本が見直されている。アメリカの哲学者レオ・バスカーリア氏の絵本「葉っぱのフレディ」におけるダニエルとフレディの会話「春が来て夏になり秋になる。変化するって自然なことなんだ。……死ぬというのも、変わることも一つのだよ。」が強く印象に残った。

この本の各ページは写真と絵で構成されている。葉っぱを通して死は恐ろしくないのだということを書き表している。そこに流れているのは日本の自然観、日本人の深い意識の中に息づいている「いのち」の連続性を実感した。

このような絵本を見直したいものである。

(四) 感性を豊にする教育

松陰の感性は泣くこと涙することがその源泉ではないか

と思う。

五木寛之氏を講演会に講師として教育会館にお招きしたら、まず松風会の部屋に入られた。そして「松陰の涙」ということに関する書籍があったら教えて欲しいと依頼された。

当日の講演では、松風会に揭げてある松陰先生の「帰郷夢断えて涕潜々」の涕を取り上げ、これからは社会の光と影の部分、暗愁、泣くこと、涙すること、悲しむこと等の豊かな感情表現が大切であるというものであった。涕くこと、涙することは松陰の得意ではなかったか。

頭だけで感じるのではなく、悟ることに近い感性が必要である。かそけきものへの感性は日本人の得意とするところである。

今の幼稚園や小学校からどうも子供の元気な声、泣く声が聞こえなくなつた感じがする。感情をどう発散しているのだろうか。

七 終わりに

この他、日本の文化を継承する教育（日本人のアイデンティティーの確立）に力点を置くなども大事にしたいことだ。

今からの世の中は、松陰の

生き方・あり方、松陰が再評価される時代ではないか。陽明学に根ざした松陰の実践行動学、即ち「一歩前に踏み出す勇氣」それを生活や教育に生かしていく時代だと思っている。

実践発表 松陰教学の実践
萩市立明倫小学校

校長 藤本和男

一 教育目標と松陰教学

明倫小学校は明治十八年明倫館の跡地に建てられた。明倫館の伝統と松陰教学を踏まえた教育を実践している学校である。

(一) 教育の基底

○明倫館の学風 成徳達材

○松陰教学精神の尊重 至誠・知行合一・子弟同行・個性の伸長・道理の実現

・至誠にして動かざるものは未だ之れあらざるなり

・志を立ててもつて万事の源となす

・万巻の書を読むにあらざるよりは、いづくんぞ千秋の人たるをえん

・一己の労を軽んずるにあらざるよりは、いづくんぞ兆民の安きをいたすをえん

・人賢愚有るといえども、各々一二の才能なきはなし

・凡そ生まれて人たれば宜し



く人の禽獣に異なる所以をしるべし

(二) 学校経営の基本方針

・伝統をふまえた創意ある教育活動の展開に努める（地域に開かれた特色ある学校づくりをめざす）

・個性を伸ばし、主体的に学ぶ学習活動の展開に努める。（熱く燃える心を育み、学ぶ力や創る力を育てる）

・豊かな心とたくましく生きる抜く力を育む教育の推進に努める。（温かく広い心を育て、生き抜く力を高める）

・常に課題意識をもち使命感に支えられた研修活動の推進に努める。

・子供に生きてはたらく教育環境の整備に努める。

・保護者や地域社会との連携を深め、ふるさとを愛する心の育成に努める。

(三) 校名の由来

「明倫」の由来は、松林桂月筆の額「孟子、滕文公上：

明倫の章」の「庠序学校を設為して以て之を教う。庠は養なり。校は教なり。序は射なり。夏には校と曰い、殷には序と曰い、周には庠と曰う。学派則ち三代之を共にす。皆人倫を明らかにする所以なり。人倫上に明らかにして小民下に親しむ。」による。人間の道を明らかにして教え導く学校ということである。

二 松陰教学の実践

(一) 朗唱教育

特色の一番は「朗唱教育」である。学年で松陰先生の言葉を選び各学期に一つずつ毎朝朗唱している。今の言葉が昭和五十七年からで五十五年までは学年目標として指導していた。

ねらいの第一は、郷土の先覚者に誇りを持ち、郷土を愛する心を育てること。二番目は松陰先生の生き方に学び、高い自己実現を目指すこと。三番目は早朝の朗唱により心の安定を高め学習への意欲を高めること。言葉が難しいが、そのままで指導している。今の子供たちに生きる力になるだけでなく長い目で将来に生きる力になることを願っている。ほとんどの子供が十八の言葉を覚えて卒業している。

初めて明倫小学校に赴任した教師は「やらせの教育」ではないかと反発もあるが、そのうちにそのよさを理解し、実践している。

(二) 松陰読本の活用

週に二回(水・木)掃除を通して「子弟同行の教育実践」を行っている。木造校舎で雑巾がけを必要とする場所が多く、水道も校舎内にはない。大変だが子供も教師も頑張っている。

松陰読本は昭和三十四年に、明倫小学校内社会科研究会で作成した。その後何度かの改訂を行い現在では山口県教育会が出版している。萩では各学校とも四学年児童の指導に活用されている。

四学年一学期に「松陰の幼年時代」「御前講義」二学期に「松陰の修業」三学期に「松陰読本のまとめ」全体で七時間、五学年は七時間、六学年は八時間の合計二十二時間を当てるようになってい

(三) 総合的な学習での取り組み

本校では「総合的な学習の時間」に松陰先生の学習時間を取り入れている。

例えば、四学年では「なるほどザ・萩(明倫秋祭り)」で萩の宝物、松陰先生・歴

史・史跡を学習する。五学年では「観光ボランティアをしよう」という活動で松陰先生をはじめ歴史上の人物を扱っている。六学年では「ウォークラリー In 城下町(明治維新発祥の町)」で松陰先生を学習する。

(四) 資料室の活用

四学年以上の子供を指導するための教師用資料として「明倫館の教育と吉田松陰先生」を作成している。また展示資料室も設置している。

(五) 子どもが学ぶ松陰に親しむ会

教育会萩支部では市内五・六年児童を対象に「松陰先生に親しむ会」を行っている。

三 教職員への啓蒙

(一) 管理職研修

全管理職を対象に毎年八月四日に松陰に親しむ会を行っている。

(二) 教職員研修

社会科部会を中心に各学校で研修会が行われている。新しく明倫へ転任の教員は仲間入りのためにも松陰を学習することとなっている。

四 教育改革と松陰教学

本校では「伝統と創造」を合言葉に教育改革を進めている。特に心にかかわる教育は、松

陰教学を中心に実践している。

その一方で時代を見据え「マルチメディアを活用した教育」にも取り組んでいる。松陰教学の「個性の尊重、意欲や心のふれ合いを重視した教育」は「夢や知恵を育む教育」であると思っている。(児童の感想文の紹介 省略)

参考「朗唱文」

一学期

○ 今日よりぞ 幼心を打ち捨てて 人と成りにし 道を踏めかし(一年)

○ 万巻の書を読むに あらざるよりは いずくんぞ 千秋の人たるをえん(二年)

○ 凡そ生まれて人たらば 宜しく人の禽獣に異なる所以を知るべし(三年)

○ 凡そ読書の功は昼夜を舍てず 寸陰を惜しみて是れを励むにあらざれば 其の功を見ることなし(四年)

○ 誠は天の道なり 誠を思ふは人の道なり 至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり誠ならずして未だ能く動かさず者はあらざるなり(五年)

○ 体は私なり 心は公なり 私を役して公に殉う者を大人と為し 公を役して私に 殉う者を 小人と為す(六年)

二学期

○ 世の人は よしあしごと いわばいえ 賤が誠は神ぞ知るらん(一年)

○ 一己の労を軽んずるにあらざるよりは いずくんぞ 兆民の安きをいたすをえん(二年)

○ 志を立ててもって万事の源となす 書を読みてもって聖賢の訓をかんがう(三年)

○ 人の精神は目にあり 故に人を観るは目において 胸中の正不正は眸子の瞭ぼうにあり(四年)

○ 道は即ち高し 美し 約なり 近なり 人徒に其の高く且つ美しきを見てもって及ぶべからずと為し 而も其の約にして且つ近く 甚だ親しむべきを知らざるなり(五年)

○ 冊子を披繰れば 嘉言林の如く躍々として人に迫る 顧うに人読まず 即し読むとも行わず 苟に読みて之れを行わば則ち 千万世と雖も得て尽くすべからず(六年)

三学期

○ 親思うところにまさる親ごころ きょうの音ずれ 何ときくらん(一年)

○ 朋友相交わるは 善導をもつて 忠告すること 固よりなり(二年)

○ 人賢愚ありと雖も 各々

一二の才能なきはなし 湊合して大成するときは必ず全備する所あらん(三年)

○ 其の心を尽す者は 其の性を知るなり 其の性を知れば即ち天を知る(四年)

○ 仁とは人なり 人にあらざれば仁なし 禽獣是れなり 仁なければ人にあらず 禽獣に近き是れなり 必ずや仁と人と相合するを待つて道というべし(五年)

○ 天地には大徳あり 君父には至恩あり 徳に報ゆるに心をもつてし 恩を復すに身をもつてす 此の事終えざれば 此の身息まず(六年)

松風会役職員一覧

役職名	氏名
理事長	松永 祥甫
理事	二木 秀夫
理事	大田 恭次
理事	谷口 不二彦
理事	岩本 肇
理事	河村 太市
理事	石原 啓司
理事	濱本 研一
理事	吉村 洋輔
理事	岡本 早智子
理事	陶山 長
監事	原田 寿男
監事	西本 正彦
事務局長	室 謙司